

# I. はじめに ー本研究の意義と目的ー

鷲尾純一（筑波大学心身障害学系）

## 1. 目的

重度難聴児では乳幼児期から言語指導を開始することが一般的になっている。また平成12年度から「障害の早期発見と早期療育を行うことを目的」として新生児聴覚スクリーニングがモデル的に実施され、現在各地で実施方法などの検討がおこなわれている。このような状況においては、乳児期からの指導する事例がますます多くなることが予想される。

重度難聴児への聴覚音声情報は非常に制限されているので、言語習得を促進するためにはさまざまな配慮が必要である。本研究では、言語獲得前からの母子のコミュニケーションとそれを通して学習される初期言語段階の語の機能に焦点を当て、以下の目的で研究を計画した；

1) 重度難聴児に対して母子コミュニケーションを重視した指導を行うことにより、前言語期から初期言語の段階において、どのようなコミュニケーション機能と音声形式（有意味発声から語への変化など）の発達が見られるのか、その様態について具体的な資料の集積を行う。

2) 評価法を利用する際に必要とされる、語のコミュニケーション機能カテゴリの分類基準を作成する。

3) 機能カテゴリを利用した語彙発達評価法の開発を行う。

## 2. 本研究の意義

重度難聴児の言語習得においては、大別して音声言語を目指すものと、手話を目指すものとに分かれる（後者の場合には聾児と表現することが適切であろう）。本研究で研究対象とする重度難聴児は、早期聴覚補償により音声言語の獲得を目指すものであるものであり、その指導を進めるに当たっては、以下の研究課題がある；

・早期の聴力評価と聴覚補償の手続きを整備し、音声言語習得を目指す子どもを明確にすること。

・初期の音声言語が適切なコミュニケーション機能を有して発達しているかを評価する方法を持つこと

・初期言語においては未熟である音声形式の発達をコミュニケーション機能との関連で評価する方法を持つこと

・不明瞭である難聴児の音声形式を、画像、音声、文字がリンクされた形のデータとして記録する方法を持つこと

従前の難聴児の初期言語に関する評価は、語彙の量的増加を追跡することや品詞分類などによるものが多かったが、運用の実際における質的な評価は十分ではなか

った。音声言語のコミュニケーション機能を評価する方法を開発することは、重度難聴児への係わり方の指針を難聴児の言語指導に当たる専門家および養育者に提供することを意味し、将来の指導プログラム開発に向けてもその意義は大きい。

健聴児の言語発達研究において、発達心理学の領域で、子どもと大人の相互作用の重要性が強調されている。そのよう立場からは、語のもつ表示機能だけでなく、さまざまなコミュニケーション機能に注目が向けられている。また、言語獲得研究のための情報処理システムの開発によって、大量データの共有化の試みが欧米で積極的になされて、わが国においても研究が進められている。難聴児の言語学習および言語指導に関する研究においては、このような状況を背景に、母子のコミュニケーション関係を基盤にした新たなデータ収集が必要な段階にあるといえる。本研究においては、母子あるいは指導者と子どもとのコミュニケーション場面を丁寧に再現し、また画像及び音声サンプルとして収集することをねらいとした。